

〔論文〕

ゆらぐマチスモ 「転換期」メキシコにおける男性アイデンティティ

林 和宏 (Kazuhiro HAYASHI)

九州大学大学院

はじめに

なぜマチスモは語り続けられるのだろう。その終焉が言われて久しい今日においてもマチスモという現象はメキシコ文化に言及するに際して、また日常的なコミュニケーションの中に顔を出す。メキシコにおける男性論はとりわけ21世紀を目前として（再）活発化する。そこで見受けられる論調は、大別するならば、移動、情報化、高速化、ハードからソフトへの転換などに特徴付けられる「転換期」における社会変化の下での旧来からの男性アイデンティティの動揺とその暴力的な再創造にまつわるものであり、もう一方は、旧来の男性アイデンティティ論では捕捉不可能な新しい男性像の登場（＝発見）に力点を置くものである。一見背反するかに見える両者も、自明ではない男性アイデンティティの存在が議論の担保とされる点では共通であり、男性のヘゲモニーの脱中心化に焦点が当てられ、男性内部での多様性の強調がその基調を成す。

人文・社会科学を問わずマチスモは長らくそれ自体の内実がとわれることのない説明項とし

て機能してきた感が強い。メキシコ人の国民性・文化に始まり、貧困、パターン的な政治関係がマチスモなるマジックタームを媒介として鮮やかに解析されていくさまを目にすることは少なくない。しかし、ひとたびマチスモがそれ自体説明を要求されるべき項目として登場したならばどうであろうか。「転換期」は我々に自明の存在であったメキシコにおけるマチスモという男性アイデンティティの再考を促す手がかりを与えているようにもみえる。

本稿第1章では、国民文化論を始めとするメキシコ人論におけるマチョのありようが整理され、第2章ではそれを虚偽に満ちたステレオタイプとして批判的に向かいあっていこうとする努力が議論される。そして第3章では、こうした議論を引き受けつつ転換期のレトリックの下、とりわけメキシコ内部で議論されることになる21世紀における男性アイデンティティの揺らぎ、マチスモ（論）の現在に焦点があてられる。

1. マチョとは誰なのか

(i) 語られる男たち

マチョとは誰なのであろうか。マチョになるとはどのようなことなのであろうか。知られるように、オスカー・ルイスはその著作『サンチェスの子供たち』において、たとえ相手に殺されても、降参せず、微笑みを浮かべて死ぬ努力をするものを男らしい（マチョ）と呼ぶと、メキシコシティにおける男性性を記述した。彼の民族誌的記述はその後にはわたってメキシコ文化や国民性に言及するに際して盛んに引用され、その現象を可視的なものとして提示することに貢献している¹。例えば、デヴィッド・ギルモアはルイスを引きつつ、挑戦や侮辱を恐れることなくそれに向きあい、笑って死に向き合うものをラテンアメリカの都市での男らしさとして描出している²。

これとは対照的に『サンチェスの子供たち』の続編を目指したというパトリック・オスターの『メキシコ人』があるが、彼によると、マチスモは危険を顧みない攻撃的行為といった誤った印象を外国人は抱きがちである。そこでは一方通行的な男性性の発露にマチスモの説明を求めることは禁欲的に回避されているが、彼は続けて「マチスモとは己の名誉を守るために最善を尽くすことを意味する。メキシコではそれ以上に、裏切りの不安と苦痛に耐える能力に関係しているのだ。メキシコ人をかくもマチョたらしめている裏切りへの不安と脆い男らしさは、スペイン征服に由来すると論じるメキシコ人もいる。」³との説明を加えている。ギルモアのそ

れが他者からの挑戦を主題にしたのに対して、オクタビオ・パスを援用した後者は「劣等感」という内面に言及している。しかしながら、アグレッシブな攻撃性と結びつく対他的なものであれ、不安を自らの内においていかに消化していくかという内面へと向かうものであれ、これらの言説の基礎にはマチスモなる現象が自明なものとして在り、広くメキシコ男性に共有されているというある種本質的な思考が横たわっている。

『サンチェスの子供たち』について世に問われた『貧困の文化』においても同様にルイスは「男性優位と男らしさ礼賛の立場は5家族のうち、すくなくとも3家族に見られ、そこでは明らかに夫が優位な立場にあり、支配的である。夫はみな浮気をし、私生児を持っている」とのメキシコ文化の描写を残しているが、その説明として提喻法的に「男らしさに起因するものである」という解釈を認めるならば⁴と、メキシコに特有の文化として男らしさが実体を授けられている。

直接マチスモなるタームを使用するかは別として、メキシコ人知識人の手による国民文化論においてもかかる男性性の論議が植民地主義、混血化とのかかわりから見出すことができる。続く節においては、見てきたようなメキシコ男性論がその基礎とする2つの代表的な国民文化論に目を向けてみたい。

(ii) パス『孤独の迷宮』、ラモス『メキシコ人における人間と文化の横顔』

メキシコの国民文化、国民性を論じるに際し、少なからぬ参照を見るノーベル賞作家オクタビオ・パスはその著作『孤独の迷宮』(*El laberinto*

¹ ルイス、オスカー『サンチェスの子供達』（柴田・行方訳）みすず書房、1969、p.34.

² Gilmore, David, *Manhood in the making: Cultural concepts of masculinity*, Yale University Press, 1990, p.16.

³ オスター、パトリック『メキシコ人』（野田他訳）晶文社、1992、p.331.

⁴ ルイス、オスカー『貧困の文化』（高山訳）、新潮社、1970、p.26.

de la soledad)』においてメキシコに対する征服およびそれに起因する精神的陵辱によって生じた劣等感を表明している。そこでパスはメキシコの国民性に言及しながら、征服(＝レイプ)に対して脆弱な「開放」を示す女性と、閉鎖的(＝引き裂かれないこと、怯まないこと)な男性という2元化を、性的レトリックを駆使することによって示している。そしてその閉鎖性は猜疑心と不信感のひとつの表現であるとする。

チンガールすることが能動的、攻撃的および閉じたものであるのに対して、チンガールされるとは、受動的、無気力で、開かれたものである。チンゴンは開くもの、マチョである。チンガーダ、エンブラそして明白に受動的なものは、外部に対して無防備である⁵。

チンゴンとは性的な意味にとどまらず「開くもの」であり、他者の中にむりやり入り込むことを表す究極的な攻撃の概念なのである。そして、そのイメージは常にスペイン征服者の姿とオーバーラップされるものである。また、チンガーダとは犯された母であり、「征服はまた、歴史的な意味においてのみならず、インディオ女性の肉体に対しても同様に暴行であった」⁶と彼が言うように、その事実は征服と連想されるものである。裏を返すとメキシコ人は「チンガーダの子」であるという事実を引き受けざるを得なくなるのである。

征服の修辞が伝統的に性的言語をもって彩られてきた如く、ここでの語りも征服者としてのスペイン人、被征服者としてのインディオ女性、そしてその惨状を、ただ指をくわえてみている

⁵ Paz, Octavio, *El laberinto de la soledad*, 4a edición, Fondo de Cultura Económica, 2002, p.85. (パス、オクタビオ『孤独の迷宮—メキシコの文化と歴史』(高山・熊谷訳)法政大学出版局、1982)

⁶ Ibid., p.94.

ことしかできなかったインディオ男性、こうした構図がメキシコの歴史を規定してきた⁷。その反動としての過剰な男性性の発露という表現は、言うならば格好の精神分析の対象を構成する。

メキシコ国民文化論の端緒を画すその著作『メキシコにおける人間と文化の横顔(*El perfil del hombre y la cultura en México*)』においてサムエル・ラモスは、劣等感およびそれに基礎をおく不信感を隠蔽する反動としてメキシコ人の心理が形成されると指摘する。彼は心理学者アルフレッド・アドラーの「劣等感は父親の力と比し自らの無力さを認識した幼児に見られる」との言を引きつつ、征服による劣等感に関して以下のように表明している。

メキシコが誕生した際、子供と大人との関係同様に、文明化された世界に遭遇した。これは幼児的思考からは理解困難なものであった。こうした不利な状況で劣等感は生まれ、征服、混血および自然の極端な広大さによって悪化していった⁸。

そこで彼は、メキシコ人の精神構造を知るための最良の例として「ペラード(pelado)」なるものを提示している。スペイン語の語義「裸」などからも類推可能のように文字通り「自分たちの魂を晒けだして生きる人間」⁹である。そこで描かれるペラードは極めて原初的な人間像を呈し、「価値のない存在(un cero a la izquierda)」とある如く、自我の獲得に失敗した、文明、父と

⁷ 非西洋の「他者」およびその空間の女性化、それを基礎とする「救済＝従属化」の正当化に関しては、Barker, F., Hulme, P., Iversen, M., and Loxley, D. (eds), 1985. *Europe and Its Others*, Vol.2. Colchester: University of Essex に収録された Hulme, P. や Carr, H. の論考が重要である。

⁸ Ramos, Samuel, *El Perfil del Hombre y la Cultura en México*, Editorial Planeta, México, 2002, p. 51. (ラモス、サムエル『メキシコ人とは何か—メキシコ人の情熱の解明』(山田訳)新世界社、1980)

⁹ Ibid., p.53.

いった修辞の反照、あるいは欠如態としての自己である。しかしながら、そのペラードを「最低の社会動物群に属し、大都会の屑人間である。経済的ヒエラルキーにおいては労働者階級以下であり、その知性は原始人なみ」¹⁰としながらも、それは「国民性のより基本的で実によく描出された表現」¹¹とする。

ここで括目すべきは、その著作においては、国民の劣等感が男性的で勇敢な抗議の形態であるペラードと結び付けられ、メキシコ性と男性性の発露が接続されている点である。こうした議論はパスの作品でも見たように植民者であるスペイン人があまりにも強大であったが故に、自らの土地、あるいは女性を奪われ、そして自らの男性性を否定された被植民者男性の抗議の形態という極めてジェンダー化された寓話を背後に背負うものである。

ヨーロッパ人は、科学、芸術、技術などなどすべて持っている。我々にはそのようなものは何もない。しかし・・・我々はとても男性的なのだ¹²。

このように自らに何も持ち得ない彼らは男らしくある、という事実によって自らの空虚さを満たそうとする。ラモスによると、ペラードたちは自らの自信回復を必要とするが、現実的にはそうした価値をすべて剥奪されているため、虚構的なものでそれを補填していくことが要請される。さながら「空虚さの最中を彷徨するうちに予期せず救いの板（＝男らしさ）に出くわした漂流者」¹³の様相を呈することになるのである。

(iii) 語りの齟齬

さて、しかしながらここでこれらの議論を基礎付ける「メキシコ人」を初めとする人間分節に検討を加えることが必要になってくる。なぜなら、これらの著作が記された当時―現在においても無論それは係争の対象ではあるが―メキシコ人であることそれ自体が問題含みのテーマであり、不用意にそれを前提することはできないのである。限定された知識人らの言説が代表され、ルイスの民族誌的記述のようにごく限定されたケース・スタディが容易に国民性にまつわるアイデアへと転じてしまうのである¹⁴。

男らしさにまつわる多くの論調が、それを労働者階級に還元する傾向をもつ。道徳的な観点や、国民文化論の類から距離をおいた客観的・科学的なマチスモ論が確立されてこなかったことを指摘し、「マチスモとマリアニスモ」を世に問うたスティーブンスは、階級への言及において、とりわけマチスモを論じるに際してフェミニスト側から焦点化される家庭内における女性への暴力の問題を稀な事例ではないと断りながらも、もっぱら低い階級に限定される現象であると論じるにとどめている¹⁵。ラモスがメキシコ人の国民性を代表させたペラードは大都会の周縁部を形成し、そこにおいて想定されているメキシコ人とはある意味、極めて近代的な「都市居住者」であり、「労働者以下」の者である。次の記述は彼の国民文化論を理解する上で示唆に富むものである。

インディオはメキシコ人口のかなりの位置を占めているものの、この国の実際的な生活にお

¹⁴ Lomnitz-Adler, Claudio, *Exits from the Labyrinth, Culture and Ideology in the Mexican National Space*, University of California Press, 1992, p.255.

¹⁵ Stevens, Evelyn, "Machismo and Marianismo", in *Crossing Currents, Continuity and Change in Latin America*, 1998, p.128.

¹⁰ Ibid., p.54.

¹¹ Ibid., p.53.

¹² Ibid., p.56.

¹³ Ibid., p.54.

いては受動的な役割しか果たしていない。能動的なグループは、都市居住のメスティソや白人たちなど他にある。(中略)そういうわけで、インディオをメキシコの後背地 (hinterland) と考えることにしよう。しかし、今のところ彼らは本研究の対象にはならない¹⁶。

同様にペラードというある種の階級とマチスモとの関連については、性的経験やドン・ファン・コンプレックスの形で表現される中層・上層階級に対して、ヒロイズムや恐れを知らぬ勇氣によって特徴付けられる下層階級という構図をオスカー・ルイスは提示している。つまり、男性優位信仰や過剰なマスキュリニティへのこだわり、そしてそれを保証する女性の間に見られる殉教者意識は貧困の文化のみにとどまらず、中産階級や上流階級にも見出されるといった指摘を彼は残している¹⁷。

しかしながら、その著作においてはメキシコ・シティに移住した農民の都会化が標準化されたように、エスニシティにまつわる議論は展開されておらず、あくまで現代、マジョリティを構成するとされる都市におけるメスティソがメキシコのナショナル・アイデンティティおよび(男性の)ジェンダー的側面を表象している¹⁸。マチスモを構成するエスニシティや階級のつなが

りにここでは焦点が当てられているわけだが、いずれにしてもルイスの議論や、ラモスの言うペラード的男性像に見られるように、メキシコのナショナル・アイデンティティとマチスモを接続する作業においても、その説明が特定の階級・地域性・エスニシティに帰せられてしまうという誤りを犯している。

2. ステレオタイプとしてのマチョ；男性アイデンティティの語りの多様化

見たようなマチスモを構成する語りの齟齬、矛盾が意味するところは何であろうか。それを指摘することの意味合いはどこにあるのか。カルロス・モンシバイスは『ラテンアメリカ・カリブ文化辞典』の「マチスモ、メキシコ(人)」という項を「メキシコ革命の時期においてはマチョであることはそれほど特別なことではなく、すべての男がマチョであるか、あるいはそうであろうと考えられていた」¹⁹と書き起こしている。彼によるとフロイト理論のメキシコへの導入が今日的な意味でのマチスモを生み出し、生物学的な男一女(macho-hembra)というシンプルな二項対立を超えて、死に直面したときの勇氣、他者への優位、女性の脆弱性および女性的な男性に対する卑下を表すようなプライドの証明、というコノテーションが付加されることになったという。

アメリカ・パレデスは、ビセンテ・メンドーサのコリード(corrido)研究に言及し、19世紀後半から20世紀初頭に至るメキシコ人の国民気質を描く当時のテキスト中では今日使用されているマチョ macho あるいはマチスモ machismo なる用語は見当たらず hombrismo, hombría, hombre

¹⁶ Ramos, Samuel, *ibid.*, p.58.

¹⁷ ルイス、オスカー『貧困の文化』(高山訳)新潮社、1970、pp.xxi-xxii.

¹⁸ 3節で見るガットマン、ミランダらに大きく依拠し、サッカーと男性アイデンティティとの関わりを論じたものに平井伸治(2002)「ゲームの中のマチスモ」『社会人類学年報』弘文堂、があるが、ここでも同論考の注1に「本論において、メキシコ人という場合にはおもにメスティソのことを指す」とあるように、ジェンダー・アイデンティティの可変性は高らかに謳うものの、エスニック・アイデンティティは所与で本質的なものとされる。ここで平井の言うメスティソとは誰なのか。ガットマンやミランダの反本質論の背景として、米国におけるエスノセントリズムに立脚したラテン系男性へのステレオタイプの表象への抵抗が存在することがここでは理解されていないように思われる。

¹⁹ Monsivais, Carlos, "Machismo, Mexican", in *Encyclopedia of Contemporary Latin American and Caribbean Cultures*, Routledge, 2000, p.883.

de verdad, valentía, といった語が男性性に言及するに際して採用されている事実を指摘している。因みに、それは革命期においては勇敢な女性に対しても用いられたという。さらに、マチョなる用語が見受けられるようになるのは第二次世界大戦期の 1940 年代になってからとし、それがポピュラリティを獲得していった理由として次の 3 点をあげている。

- (1) ポスト革命期の悲しき産物である恐ろしきガンマンの像。安定期に投影された革命期の男性であり、それゆえに偽り。自らの欲望を満たすために一般市民を犠牲に。
- (2) 第二次世界大戦期、大国アメリカ合衆国保護の下、大役を果たすことができなかったメキシコの空威張り。
- (3) 当時、マチョと韻を踏むカマチョが政権の座に就いたこと。²⁰

好ましい男性イメージとマチョの誕生は、革命が 1940 年代社会主義の様相を脱却し保守的な展開を遂げた時点においてナショナルなステレオタイプとして登場したことを指摘し、オマリーはこうした男性表象の定着を革命の制度化、大衆の国民化を目指すポスト革命政権による社会政策と絡めて論じている。すなわち、混沌とした社会状況において防波堤としての機能を果たしたのが家族であり、その成員の健康・道徳に気遣う家長としての男性であった²¹。

マチョの代名詞ともされるメキシコのカウボーイ、チャロ (charro) のイメージは、革命後 1920 年代から 40 年代のナショナル・アイデンティティの模索の時期において元来極めてロー

カルな（ハリスコ州を中心としてアグアス・カリエンテス、グアナファト、サン・ルイス・ポトシ州南部など）伝統が「メキシコらしさ」を代表するものとして創造されたものである²²。この時期、各種メディアを通して、マチスモが「ショー」として展開された事実に言及しつつカルロス・モンシバイスは、「マチョ (男) 達の中でマチョになるとはいかようなことか」と問う。そこでは、見たような身体的な怒りの表現、恋愛関係における巧みさなどというマチョ理解に加え、自らを可能な限り映画的存在、とりわけホルヘ・ネグレテのようなチャロの英雄に類似させることが挙げられている²³。

マチスモを発明の効果として、あるいは極めて近代的な出来事として対象化していこうとする近年の議論は、メキシコ人男性が本質的にマチョであるという前提を攻撃の対象とする。かかる偏見が先取的に議論の実定性を成すことにより初めて、「メキシコでは空手や柔道が盛んであるが、その背景には、やはり男性性顕示の傾向を読み取ることができる」といった言説が可能となる。あるいは、「アステカ王国征服によって、メキシコでは父親中心社会が崩壊し、(中略) その補償として、男性側からの新たな自己主張の必要性が生じることとなった」²⁴というマチスモの来歴を問う作業もその論点先取りの効果といえる。精神分析的視座から俯瞰されたメキシコ男性は本質化され、それへの抵抗は科学・客観を語る「理論」の名の下に完封されてしまう。アルフレド・ミランダはこのような手

²² Carreno King, Tania, *El charro, la construcción de un estereotipo nacional 1920-1940*. Instituto Nacional de Estudios Históricos de la Revolución Mexicana - Federación Mexicana de Charrería A. C., 2000, pp.11-13.

²³ Monsivais, Carlos, *Escenas de Pudor y Livandad*, Grijalbo, 2002, p.113.

²⁴ 角川雅樹「マチスモと母親依存」『ラテンアメリカの女性と社会』新評論、1985、p.345.

²⁰ Parédez, Américo, “Estados Unidos, México y el machismo”, in *Journal of Inter-American Studies*, 9(1), pp.69-70.

²¹ O'Malley, Ilene V., *The Myth of the Revolution, Hero cults and the institutionalization of the mexican state 1920-1940*, Greenwood Press, 1986, p.142.

法を用いたマチスモ記述に以下の批判を加え、それがラテン系男性文化論の発展に障害をもたらしてきたと指摘する。

- (1) 形而上学的な理論に基づいた説明は、ある特定の時期に生じた出来事が後の世代にわたって直接的・不変の影響を及ぼすという仮説に依拠している。
- (2) これが生得的な病理学的説明を喚起し、メキシコの文化・歴史を、機能不全、疾病として本質的に定義・表象してしまうこと。ゴールドワートのパターナリズムやマチスモに関する著作に『神経症としての歴史』というタイトルが与えられていることから理解できる。
- (3) 国際的な遺伝決定論に依拠していること。つまり、征服においてメキシコで起こったことがラテンアメリカ大陸のみならず、例えばチカーノと呼ばれるメキシコ人の末裔達にも影響を与えているという仮説²⁵。

こうしてみると例えば、パスの手によるマチスモ論議は国民的な狂気のレベルにまで高められ、典型的な差異を脱構築するどころか、それを断定してしまっていると言える²⁶。マチスモ批評をはじめ既存の国民文化論においてはその内部に1章3節で記したような歪みを見出すことができる。そこでは、(1) 一般原則、(2) グループ、(3) 文化的特性といった3つの要素が混乱・齟齬をきたしたまま提示されている。パスのジェンダー、セクシュアリティに対する言及は女性内の差異、つまり、階級、地域差、家族構成そして人種などといったファクターには触

れないまま、女性固有の文化的特性―「開いている」がゆえに劣った―へと直結されてしまう。言うならば、ある特定の男性的イデオロギーを具現化し、それを「国民文化」と主張しているに過ぎないと言えるのである²⁷。

革命以降 1940 年代のナショナル・アイデンティティ構築期に形成されたとするマチョ・イメージは、当時のメキシコを包囲した近代なるものの行方を端的に表象している。漠として拡大していく近代空間の中で見出される安定したアイデンティティの拠り所となる何か。マチスモなるアイデンティティが近代の到来とともに創造された如く、21 世紀を迎えるいわゆる後期資本主義空間の中において生じた家父長的アイデンティティの危機は「マチスモ」の再創造に寄与しているかのように見える。

3. マチスモ（論）の現在

可変的な男性像というのが今日メキシコにおける男性論の基礎を成すものであり、近代におけるアイデンティティへの強迫観念からの脱却がそこでは志向される。マチョの死を宣言することには恥じらいを見せつつも、ポストモダン批評を基礎とする文化研究に依拠するこうした論調が意識するのは、歪曲されたステレオタイプに支持された差別への批判であり、それに苦しむ「弱者」への配慮である。

マチスモの存在を肯定するか、その死を語るかはともかく、昨今のメキシコ男性論の背景にも、ポストモダン社会のグローバル化・情報化・高速化、労働の女性化、ハードからソフトへの転換に伴うジェンダー・アイデンティティの揺らぎがある。旧と新、過去と現在、伝統と近代性が混在し、後者が前者を駆逐し、家父長的ア

²⁵ Mirande, Alfredo, *Hombres y Machos, Masculinity and Latino Culture*, Westview Press, 1998, pp.56-57.

²⁶ Franco, Jean, "Beyond the Ethnocentrism: Gender, Power, and the Third-World Inteligentsia", in Cary Nelson y Lawrence Grossberg editors, *Marxism and the Interpretations of Culture*, University of Illinois Press, 1988. p.506.

²⁷ Lomnitz-Adler, Claudio, *ibid.*, p.258.

アイデンティティを保証する旧来より自明視されてきた慣習が廃棄されるという時代に立ちあっていることがそこでは強く意識されている²⁸。

そうした論調を、M・ガットマンの『メキシコ・シティで本当の男であること』²⁹も共有している。1996年に『マチョの意味 (The meaning of macho)』として上梓された同書は2000年にスペイン語訳され、アメリカ合衆国におけるメキシコ男性研究のみならず³⁰、メキシコのアカデミズムにも大きな影響を与えることになる。彼によると、メキシコ・シティにおけるジェンダー・アイデンティティや慣習の変化は90年代半ば頃の特徴である。人類学者が信じ続けてきた労働者階級のメキシコ男性の表象は誤っているだけではなく、有害ですらあり、その男性性と近代性の再検討が目標とされるべき、とい

うのがその主張である³¹。また、別の論考では、ステレオタイプの国民性に還元されてしまうアメリカ合衆国におけるラテン系男性の飲酒習慣の表象を「文化変容」を鍵に再読を試みる³²。

かかる視座は昨今の大方のマチスモ論に共有されるものである。例えば、先に触れたアルフレド・ミランデも、ラテン系男性が均質、一枚岩で、不変的な大衆を成すものではないことに注意を喚起しつつ、ラテン系男性の現実と複雑性を捕捉していくような内的な視座の提供を目標としており³³、こうした男性アイデンティティの文化的構築性の主張は基本的にポストコロニアル状況における西洋白人男性のヘゲモニーへの自明視の崩壊を根幹においている。すなわち、非本質的で、状況的・可変的なアイデンティティの理解がこうした男性論の基礎を成している。これは同時に男性性の定義に際して不可欠な存在である、女性やホモセクシュアルといったアイデンティティの再定義をも不可避に要請する。つまり、そうしたアイデンティティが歴史的な構築物であるという認識は基本的に近年のメキシコにおけるジェンダー思想の基礎を成すものである³⁴。

また、同時に「転換期」のレトリックは、構築されたもの、あるいは喪失するものとしての男性性とは別の問題を提起する。つまり、創造(想像)の産物であり、脆弱であるがゆえに固守されるべきものとしての男性性という保守的主

²⁸ Monsivais, Carlos, “Machismo, Mexican”, in *Encyclopedia of Contemporary Latin American and Caribbean Cultures*, Montesinos, Rafael, “Cambio cultural y crisis en la identidad masculina”, in *El Cotidiano*, marzo-abril, num. 68, 1995. および同著者による “La masculinidad ante una nueva Era”, in *El Cotidiano*, mayo-junio, num. 113, 2002. などを参照。

²⁹ Gutmann, Matthew. C., *Ser hombre de verdad en la ciudad de México, Ni macho ni mandilón*, El colegio de México, 2000. オリジナルタイトルは *The meaning of macho: being a man in Mexico City*, University of California Press, 1996. 同書の翻訳がメキシコにおける男性論に一石を投じたことは否定できない。管見の及ぶ限りにおいても、2本の書評が捧げられ (Falomir Parker, Ricardo, “De machos, mandilones y otras cosas”, in *Alteridades*, 20: 2000; Fernández Poncela, Ana M, “Ser hombre de verdad en la Ciudad de México”, in *Desacatos*, 6: 2001)、その後立て続けに *Nueva Antropología* (61), *Alteridades* (23), *El Cotidiano* (113) といった学術ジャーナルにおいて「男性性」にまつわる特集が組まれている。前2者にはガットマンの論考が含まれており、とりわけ、*Alteridades* 誌においては編者として序文を記している。因みに、『ラテンアメリカ・カリブ文化辞典』におけるモンシバイスのマチスモ定義および、2002年にグリハルボ社から刊行されたマリナ・カスターニェダ『不可視のマチョ Macho invisible』などもガットマンに依拠している。

³⁰ ガットマンの著作の影響に関しては Prieur, Annick, *Mema's house, on Transvestites, Queens, and Machos*, The University of Chicago Press, 1998 や Carrillo, Hector, *The night is young, sexuality in Mexico in the time of AIDS*, The University of Chicago Press, 2002 などを参照されたい。

³¹ Gutmann, Matthew. C., *ibid.*, p.21.

³² Gutmann, Matthew. C., “Etnicidad, alcohol y aculturación”, in *Alteridades*, año 12, num. 23, enero-junio, 2002.

³³ Mirande, Alfredo, *Hombres y Machos, Masculinity and Latino Culture*, *ibid.*, p.21.

³⁴ 今日メキシコにおけるジェンダー論の展開は、Lamas, Marta, “Introducción”, in *El género: la construcción cultural de la diferencia sexual*, UNAM-Miguel Angel Porrúa, 1996 や同著者による “Cultura, género, y epistemología”, in *Los Estudios Culturales en México*, Valenzuela Arce, José Manuel (coordinador), Conaculta-Fonca, 2003 に詳しい。

張であり、その発露としての暴力、ホモフォビアが問題化される³⁵。そこでは旧来のステレオタイプが本質的に再動員され、大きな社会文化的変動という高波からの防波堤の役割を果たす。ガットマンの著作の来着を礼賛しながらも、昨今の女性の自立に対する男性側の苛立ちを描いたガットマンの一節に触れ、フェルナンデス・ポンセラは、「著者は言及してはいないが、そのような場合にステレオタイプは有用である。このケースでいくと、個々人の男性によるこのような女性への行動を、社会的に正当化し、権限付与する」³⁶と記すことを忘れない。いわゆるホモフォビアに関する言及においてもこうしたステレオタイプを見出すことができる。「愛国的になろう。ホモセクシュアルを殺そう (Haz Patria. Mata a un homosexual)。」「ホモセクシュアルに死を (Muerte a Homosexual)。」³⁷なる言説におけるホモフォビアはグローバル化・情報化する世界にさらされ異種混淆化するメキシコを憂慮した発言であり、同様に均質な国家を侵犯し、「退化」へと導く存在としてのホモセクシュアルである。そこで動員されるのは旧来からの保守的な男性主義的アイデンティティであり、上で追ってきたようなメキシコ革命以降の混乱期におけるマチョにより統治される国家の再構築プロジェクトに反する欲望の形態の抑圧の再現である。

³⁵ Cruz Sierra, Salvador, “Homofobia y masculinidad”, in *El Cotidiano*, mayo-junio, num. 113, 2002., Martínez V., Griselda, “Violencia masculina : De las fantasías sexuales de los géneros al acoso sexual”, in *El Cotidiano*, mayo-junio, num. 113, 2002., Ortiz Hernández, Luis and Granados Cosme, José Arturo, “Violencia hacia bisexuales, lesbianas y homosexuales de la Ciudad de México”, in *Revista Mexicana de Sociología*, año 65, num. 2, abril-junio, 2003.などを参照。

³⁶ Fernández Poncela, Ana M., “Ser hombre de verdad en la Ciudad de México”, *ibid.*, p.193.

³⁷ González Ruiz, Edgar, *Cómo proteger el SIDA: conservadurismo y sexualidad*, Rayuela Editores, 1994.

男性アイデンティティの危機の根幹にあるのは、女性の役割の世紀末、新世紀におけるラディカルな変化である。メキシコは男性主導の社会にもかかわらずマリンチェや聖母グアダルupesの存在からも想起されるように女性性に強い価値をおいてきた。そして、アクティブなマチスモという男性性を担保するのはあくまで女性のパブリックな排除であり、女性化した男性の「他者化」であった。そうした女性に対するイメージの変化は上で見た如く、グローバルな民主化への潮流、情報・高等教育へのアクセスなどによる社会進出の機会の増大として反映されている。アカデミズムにおいても、「女性」なるカテゴリーが社会文化的構築物であることが指摘され、そこに偏見的な本質を見出そうとする眼差しが徹底的に批判されている。21世紀のメキシコにおけるフェミニズムはもはや、こうしたジェンダーの構築性をすでに土台としており、逆にその脱政治化が憂慮されるのである。このことが意味するところは、つまり、公な領域においてもこうしたジェンダー概念が人口に膾炙しているという事実である³⁸。

無論、端的な多様性礼賛に終始せず、ステレオタイプとみなされるような出来事が日常的な現実の踏み込んでくるという事実、男(女)性アイデンティティの脱構築を謳う昨今の議論も鈍感なわけではない。ガットマンもアントニオ・グラムシの矛盾意識 (*conciencia contradictoria*) に触れ、日常現実の多様性とともな伝統・過去に属するものが現在のアイデンティティ決定に寄与することが言及され、終章でもメキシコ男性のステレオタイプがアカデミズムのみならず、サントドミンゴ地区の日常的な会話や意識の中に息づいていることが描かれる。しかし、「社会

³⁸ Serret, Estela. “El feminismo mexicano de cara al siglo XXI”, in *El Cotidiano*, num. 100, 2000.

文化的規制の中で創造的に成すこと、つまり、彼らの役割を表現するオリジナリティは、あらかじめ決定された何かではない」³⁹とあるように、主体決定に関与する社会的規制をすり抜ける軽やかなポストモダンの主体性が強調される。かかる社会性の強調はあくまで「赤子を眠りにつけるためあやすアルコール依存症の父親、息子たちを殴る母親、トルティージャを買いに走るため姉妹と競う男の子」⁴⁰たちの「非マチョ性」（＝マチョと「現実」との乖離）を担保する布石とされるのである。

転換期に接しつつ展開される今日のマチスモ論はこのように、マチスモの歴史性を問うものおよび、それによってもたらされるアイデンティティの危機に端を発する男性性の暴力的な再創造をめぐるものに収斂されるように思われる。

おわりに

時代錯誤とも思われるマチスモという男性アイデンティティは 21 世紀に突入した近年においても饒舌に語り続けられている。見てきたように、マチスモにまつわる語りは容易な一般化を拒む多様性を孕むものである。今日においてもそれは廃却されるどころか、語られ、学ばれ続けられ、人々の日常として生きられている。そこではマチョの真偽、在・不在を問うことよりも、多様性を内に孕みながらも現実として生きられる「語りの共同体」（古谷嘉章）として論じるほうが建設的であるように思われる。例えば、本稿で目指してきたのは、ガットマンらに見るようなマチスモの脱構築作業に対する批判ではない。ステレオタイプに根ざした差別を読みかえていくものとしてそれらの価値は減じら

れるものではないし、それにかかる共同体を構成するひとつの語りのイディオムとして認識することが重要である。

そういった意味でガットマンやミランダらに依拠した「現実のマチョとは彼らから肯定的に捉えられる男性像でないばかりでなく、また現実のマチスモも従来のイメージによってのみ説明しきれものではなかった」⁴¹なる言明はそれ自体正しい。しかしながら、それは誰の視点から語られているのであろうか。語ることでできるものの視座を代表してはいないだろうか。グローバリゼーションや情報化を基礎とする男性像の均質化という一般化への抵抗、文化研究などに依拠する反本質論がそうした論調を支えている。

しかし、そこで忘却されるのは、例えば、暴力としてのマチスモを経験する弱者の側（女性、同性愛など）からの本質的な問題提起一女であるがゆえ、男が存在するがゆえの困難一である。また、何よりもこうした記述が隠蔽するのは脱構築的な男性論以前のメキシコ人男性がすでに多様であったという事実である。あるいは、逆に、あまりに自明なものとしてマチスモを受け入れてきたがゆえにそれに依拠してしか自らを語ることができないものの存在である。第 1 章で見たようにある種の文脈においてマチスモは現在においても公に、意識的に、そして排他的にメキシコ固有の自我意識として不断に交渉され続けているという事実は、主体の多様性の主張とは異なった、すなわち、語りのポジションを含めた議論を設定しなければならないものである。

いずれにしても、「転換期」は我々に、マチスモという概念が決定済みのそれではなく、不断

³⁹ Gutmann, Matthew. C., *Ser hombre de verdad en la ciudad de México, Ni macho ni mandilón*, ibid., p.349.

⁴⁰ Ibid., p.349.

⁴¹ 平井伸治, ibid., p.181.

にその意味が交渉され続けているという事実を如実に示唆するものである。マチスモは単純に男性内部の多様性を説くことによって廃棄処分できるような概念ではないという事実が確認されなければならない。それが新しいマチスモ論へと開いていく第一歩となるのではないだろうか。

